

カセット用

水牛通信 毎月1回10日発行 1985年1月10日発行 通巻66号 1980年5月23日第三種郵便物認可

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

水牛通信

年頭所感

小泉英政 2

トルコ行進曲

斉藤晴彦 30

メモ・ランダム

高橋悠治 4

え

柳生弦一郎

HELP! ブタ草

竹内晶子 26

編集

高橋悠治

明日は、ゲレンデのブタ草

竹内晶子 28

VOL.7 NO.1

毎月1回・10日発行

定価200円

物を買うまえに
立ちどまって考えよう
街に出るまえに
家の中をひとまわりして考えよう
ほんとうにその物が必要なのか
必要だとしても
自分で作れないのか

物を買わないということは
節約とか
省エネとか
の為ではない
消極的で貧しくなることでもない

のをもつこと
嫌を研ぐこと

今年は物を買わないで生きること考えよう
物をよく見て
物の正体をつかもう
誰が作ったのか
どうして作るのか
どこで生産されたのか
誰の利益になるのか
物を買わないということは
自分の世界に閉じこもることでも
仙人になることでもない

豊かになること
自分で作ること
昔の人はどうしていたのか

木について考えること
土について考えること
石について

草について
生きものについて考えること

絵を画くこと
線を引くこと
土をねること
水に触れること

友だちについて考えること
村について考えること
日本について考えること
アジアの人々について考えること
アフリカの人々について考えること
あやつられないこと
肉体をとりもどすこと
家のゴミ箱を汚さないこと
あこがれていたものを
愛すること

(小泉英政)

メモ・ランダム

電車の終点は入江になっている。帆をおろしたヨットのひしめくむこうには松林。海岸の散歩道を右にまがると坂の上にむかし住んでいた家が見える。カーラヴェーゲン9番地。もう知りあいてもいなのでそこを通りすぎるとつきあたりにはひらける沼。だれもない。鳥一羽いない。折れまがった枯れ草に吹く風もない。午後3時。

そこは世界でいちばん遠い場所だった。だけれども遠くはなれていた。だけれどもはなれたとき心のなかだけでもかえっていける場所だった。

●

パレは日本や中国にもいったけど世界でいちばん遠い場所はサンフランシスコだった、といった。そのことばを

ききながらパレのオフィスのあるNKの窓から夕日をあびたビルを見ていると、それがなんとなく金門橋と二重写しになって、世界でいちばんエキゾチックな街を見ているような気になった。何年もたってほんものの金門橋をはじめて見たとき、それはストックホルムのビル街の影と二重写しになっていた。

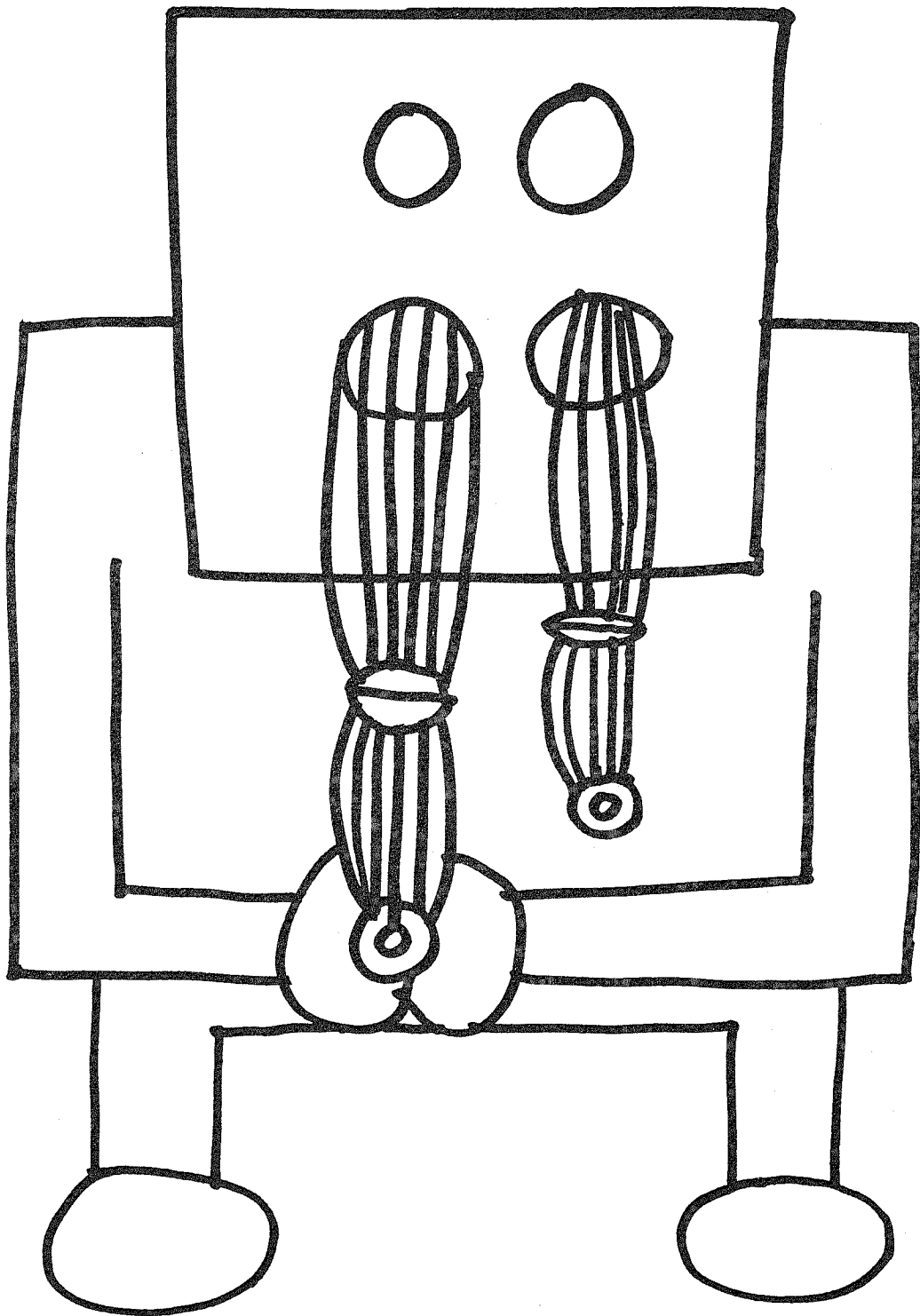
●

今日は公休のはずだったんだけど朝9時に電話がきちゃってね、人手がなくなっただからどうしてもでてくれて。こっちも暮でしょう。保険の払いか自分もちでけっこうあるんだよね。三十万もってかえろうとおもったら三十万はかせがないとね。しかたないからでてきたんだけど、どうせよびだす

なら朝6時頃にかけてもらいたかったな。けっこうお客さんいるんですよ、この辺から築地とか芝浦へかよってひとがいるんだから。高速つかっていつてくれ、なんてね。三千円にはなりませんよ。そういうひとは毎日タクシーで通勤してるわけ。だけど9時頃はもうダメだね。電車でいった方がはやくもん。ひろってもみんな四百七十円ですよ。一日走りまわって一万八千円しかもってかえれなくてさ、しょうがないから自腹切って八千円たして会社にだした、そんなひともいたよ。歩合制だからね、最低額がきまってるわけ。

●

審判が勝ったボクサーの右手をもちあげたとき、みんなはもう立ちあがっ



てかえりはじめた。黒人の若い男といっしょにきているステラの姿もリングのむかひにチラリと見える。いまのうちに家にかえって荷物をまとめよう。ルネがまつわりついて、バイバイ、またあとでね、とくりかえす。どういふことか、わかっていないのだ。バイバイ、またあとでね。バイバイ、またあとでね。ママがもうすぐかえるからだいじょうぶでしょう、ちょっとだけお留守番ね、と家をでると、門の前にパトカーがとまっけていて、そのわきに立った警官が無線連絡している。知らん顔して通りすぎたが、家のことが気になって、裏門にまわる。そっと窓からのぞいて見ると、ちいさい男の子は床にすわって、バイバイ、またあとでね、とまだくりかえしていたが、急に首のバネがはじけとんで、頭が床の上をころげまわりながらガソリンをまきちらし、あっといふ間に炎があがった。

息子だとおもって何年もいっしょにくらしていたのに、時限装置のついたアンドロイドだったのか。それではその母親はいったい何者だろう。火につつまれた家のなかからまだきこえる。バイバイ、またあとでね。バイバイ、またあとでね。あのくりかえしがフィードバックをおこして発火をはやめたにちがいない。

立ちどまると一面の星空とカエルたちのコーラス。やっとさがしあてた家のあたたかい電灯の光の下で、谷川俊太郎と武満徹がビリー・ザ・キッドのピストルのはなしをしていた。石原慎太郎は輪ゴムのパチンコでハエをうちおとしていた。影の方にまだ何人かい

たが名前をおもいだせない。みんな若い芸術家だった。こっちはかれらの世界をのぞいている少年だった。あの人たちは人間のあたたかさをどこかで信じていた。そこによりかかって表現していられた。

志をもちつづけることは一九六八年以来ちがう意味をもちはじめたようだ。イデオロギーや時の流れ、体制などを軸にしてこちら側か向う側かに二分できない「生活」の発見が、あの世代にはあった。
いま三十代の終りにさしかかっているはずのかれら、ちりちりになって管理社会の周辺にかくれていても、感性のつながりなのか、おたがいに感応力

をもちつづけ、いくつかのちいさな結びつきが、必要ならある日、網のように社会を包みこんで浮き出してくる、そんな磁力の分子たち。

おもいがけないところで、そのひとりに出会うことがある。編集者、農民、コンピュータ会社、自動車修理、季節工。おおきな組織の歯車の一つではなくちいさくても自立した職業、表に立つよりは裏で目立たない位置、仮のしごと、いつつぶれるかわからないが、そうしたら他のものになりかわって生きつづけるだろうとおもわせる職種、だからどこかおちつかず、反面あたらしい思いつきをしごとにつきこめるような、ある距離のとり方。

こういう態度が、しかたなくそうなったのか、意識して選んだのか、あの世代のエトスになっているように見える。

それぞれに信じることはちがう。だ

は別名だったのだろうか。「生活」はじっさいの生活のなかに見えかくれしていた。いまでもしている。それがあるかぎり、日常生活は仮のものでしかない。

とりあえず何かを信じている。それも仮にそうしているのだが、信じているという感じだけは、たしかに手でつかめるものとして、そこにある。ほとんど純粹持続としかよべないような志があつて、その磁性を感じていることが、一九七〇年代の暗い長さのなかで、毎日が確実に過ぎてゆくことにも、うるたえず、むしろ日々の確実さを味方にして生きつづけるまでに、かれらをひきずっていったのだろうか。

アラン・タネールの映画「ジョンナスは二〇〇〇年に25才になる」を見ながらおもったのは、一九六〇年代後半におこった一連の運動が一九七〇年代に地下にはいり、おもいがけないかたち

が、ともかく何かを信じている。こっけいなほどに。信じるのが感性の機能の一つだといわんばかりに。

そう、それはもう抽象的な思想ではありえなかった。生活をすてて世界を変えることだけを、それも最高権力だけをうばいとることをゆめみていた世代は、とっくにかれらの前で破産していた。根拠のない楽観で潮流の変化に目をつぶるか、あっさり転向するか、どちらにしても権力や体制と変わりない姿をさらしていたのだ。

「生活」は「思想」のようであれこれかてくくれるような現れ方をしていなかった。日常生活そのものでもなかった。生活を変えることは、生活のなかでしかできないことで、はじめから予定されたコースもなく、指針も役立たず、それどころか変えようという意図さえなく、ふりかえって変わってしまったていることを認識できるだけで

でふたたび地上にもどったことだけではなかった。この種子にこめられたエネルギーはいまや、つきようとしている。だから、ここに登場する八人の、ちがう信条、ちがう生きかたのどれにも加担することなく、どれかを拒否することもなく、どれにもいくらかの共感といくらかのこっけいさを感じながらみていることができるのだ。

住民自治もエコロジも自由教育も、リサイクルも、ただでものを分配するのにも、老人問題も自発的失業もタレントラもおなじテーブルで語りあうことができるのは、一九七〇年代の裏側に根をおろしていた別な社会のモデルをあらわしているのだろう。風に吹きよせられるように、たいしたきつかけもなく八人が、ちがう生きかたそのままの一つの場所にあつまってくるのは、六八年代の磁力がはたらいているのだ。それは都市の中心でもなく、いなかで

はなかったらうか。

変わった、変わったといつてなんにが変わったのか。かんがえてみても不たしかなものでしかない。どこかで変化がとまって固定されるようなものではないのだ。手作りの、とか、手触りのたしかな、とかいってみたりもする。だが、そんなことばは、一九七〇年代になって、あのときゆめみた「生活」が管理社会の表面の日だまりで「ライフ・スタイル」になって売り買いされたとときにでてきたことばにすぎなかった。一九六八年が「生活」といったときの詩は、そこからぬけてしまったいた。

あのときの「生活」は一步先か一步後に見える幻だったのか。感性の解放は、管理された終わりのない毎日のつながりのなから突然咲きだした仇花だったのか。それよりは、やりきれないほどゆっくりとした死の苦しみの、実

もなく、ちょうど中間の場所だった。都市のはずれに近い農場、これこそあの世代の見つけた仮の会合の場所にふさわしい。しごとを変え、場所を変え、信条さえも変えて、こうした出会いがいたるところでおこり、そこから運動さえもよみがえったりする。

それでも、かれらは約束の地にははいれない「ちいさな予言者たち」だ。また風に吹かれてちりぢりになってしまふ。こどもたちが壁にえがいた落書きの絵姿だけをのこして。

そうだ。一九六八年五月のバリは落書きがあふれていた。ことば、ことば。かれらがその後を生きのびることができたのは、六八年が論理だけではなくて詩をもっていたからだ、といわれよう。だが、詩はことばでできている。多様な表現、ひとりひとりの生活だて表現だ、それがいちどきにあふれだす。その余力はその後二〇〇年をもち

こたえる、何ともいいあらわせない志としてたくわえられる。

だが、ことばは、やはりことばだ。色や音やかたちでもおなじことだが、それらに表現されない領域がある。あの世代は、なんでもが表現できるし、しなければいけない、とおもっていた。「生活」は、ことばをもった生活だった。それが日常と詩の交点とみなされていた。

たとえば印刷工のマチュエー。馬糞ひろいにやとわれた農場でこどもたちをあつめて脱学校教育に熱中しているが、馬糞はだれがひろっているのか。二人の「ゼロ人間」、ただの農業労働者。ことばが日常の次元を決して超えず、「表現」に関心ももたない人たちが、つまらぬ力しごとをひきうけている。かれらの姿は、映画のはじめの方にちらりとあらわれ、下世話なうわさ話で食卓をかこんでいるが、風に吹きよせ

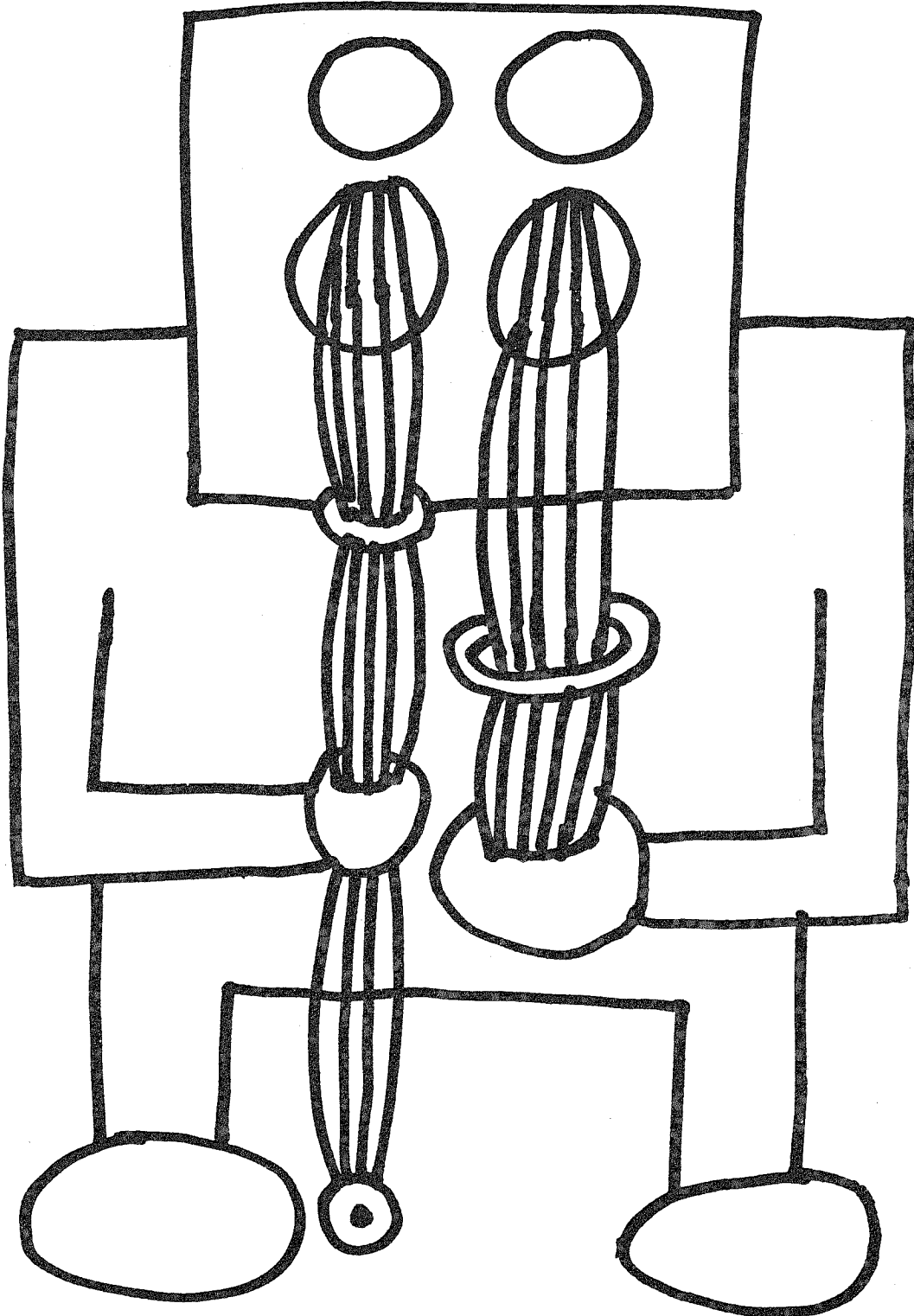
られてきたお客がふえるにつれ、テーブルからも押し出され、そのひとりりの姿が上座につく主人マルセルのうしろでアコーデオンを鳴らしているのが目にうつるだけ。ものいわぬ人はいっしょに食べることもできないのか。このディナーでもう一人立ったままであるのは主婦マルグリット。話に時々加わるが、手は調理でいそがしい。

テーブルが階級の尺度になるのは、やはりヨーロッパだ。だれが上座にすわり、どんな順位で男女がならば、肉はだれがきり、だれがテーブルから追いたてられるか。テーブルで口は食べるだけではない。議論をたたかわせるのもテーブル。食物をのみこみ、ことばを吐きだす階級闘争の場であるテーブル。

くじらはジョナスをのみこみ、吐きだした。25才になったジョナスは「光年のかなた」でアイルランドの荒野を

ひとりあるいている。これが68年のちりぢりになった予言者たちが用意した神話なのか。それにしても見なれた風景ではないか。荒野、廃墟になったガソリン・スタンドとからっぽのポンプ、ひとりぐらしの老人と若い英雄、謎めいたことばと秘密のしごと場。そして、意味ありげな試練のかずかず。かた井戸をまもり、すてられた金属をみがき、それをやきはらい、大地に埋めたものを掘りだし、山にのぼってオオワシをとらえる。やっと神秘を伝授されてみれば、それは人工翼の製作だった。飛べ、もっとたかく、星をこえて、光年のかなたへ。

何千年来の男の神話だ。女はここから排除される。性愛の対象であっても、男のゆめはわかちあえないのだ。だが、このゆめはやはり荒野のもの、砂漠のもの、不毛のなかでそだち、オオワシ(神)の怒りにふれる高みへの侵犯と



転落死に終わる不可能のゆめ。

そして遺言。「樹のなかにはいれ」。荒野ではなく、森からの再出発か。だが、これは紙にかかれたことばにすぎない。それを毎日読んでから紙をのみこめ、というのが遺言だった。ゆめはついに、ことば以上のものではないのか。

ベルリン動物園に、人間の背丈ほどの鳥がいた。まがったおおきなくちばしは、すこし欠けていた。のぞきこむと、じっと見つめかえし、それから白いまぶたが下から目をとじた。数年前に玉川高島屋で、この鳥の絵のTシャツを見つけた。魂のきょうだいの名はオニオオハシ、英語でToco Toucan 学

ヴァイオリンをいつまでもひいていたくはない、とギドンがいう。やめたら何をしたいかわからない。本をかく才能でもあれば。母が生きていたときは日記をつけていた。母のために。いまはてがみをかく位かな。

かれは、ねむれないから、といってホテルで毎晩キルケゴールの「あれかこれか」を読んでいた。

かれのおくさんはかれのともだちの作曲家といっしょにかれのモスクワの家にいる。ともだちは作曲をやめてロシア正教の狂信者になった。音楽にはひとつの声、ひとつの和音でじゅうぶんだ、といっているうちはまだよかったです。そのうち、それもよけいなこと、罪になった。黒い長外套をひきずるようになつてあるき、教会のまえでは、きまって雪のなかにひざまずいて長い祈りをささげるのだった。

名Rampastos Toco だった。ベルリンにいたのはよごれた白だったが、アマゾンの森にいるきょうだいは総天然色だ。

ニューヨーク州バッファローのヴィクトル・ユゴー・アバートメントにいたとき、毎晩のようにかかってくる電話があった。最初はまちがいの電話だったが、失礼しました、といってから、かの女はそのまましゃべりつづけた。名前も、どこにいるのか、もいわなかったが、すぐ近所からかけているようだった。こちらのへやのなかを窓越しに見ているのではないか、とおもえる時もあった。何をしゃべっていたか、まったくおぼえていない。およそ無内

アルヴォ・ペールトの音楽をきいているうちに、おもいだした。ロシアをはなれてもひきまわっているこの「ふさぎの虫」とひとつの光にだけむけた顔。だが、それも西の世界では、きもちよい感情のシャワーにしかならない。

ナサナエル・ウェストの「ミス・ロソリー・ハート」という小説のヒーロー、ミス・ロソリー・ハートの名前で新聞の身の上相談係をやっている男は、つかれきって家にとじこもり、ウイスキー（30年代だからしかたがない）とクラッカーの大箱をかかえてベッドにはいると、三日間の旅にでる。「アンダルシアの犬」にでてくる砂浜の綱ひきはじまる。死んだロバとピアノ、キリ

容な日常会話だった。相手の声のひびきをたのしんでいただけなのだ。顔もない、機械のなかの声との対話は、現実世界の外に半分はみだしているようで、目のまえにひろがっているへやのなかの生活は、ゆめのようにうすれていった。

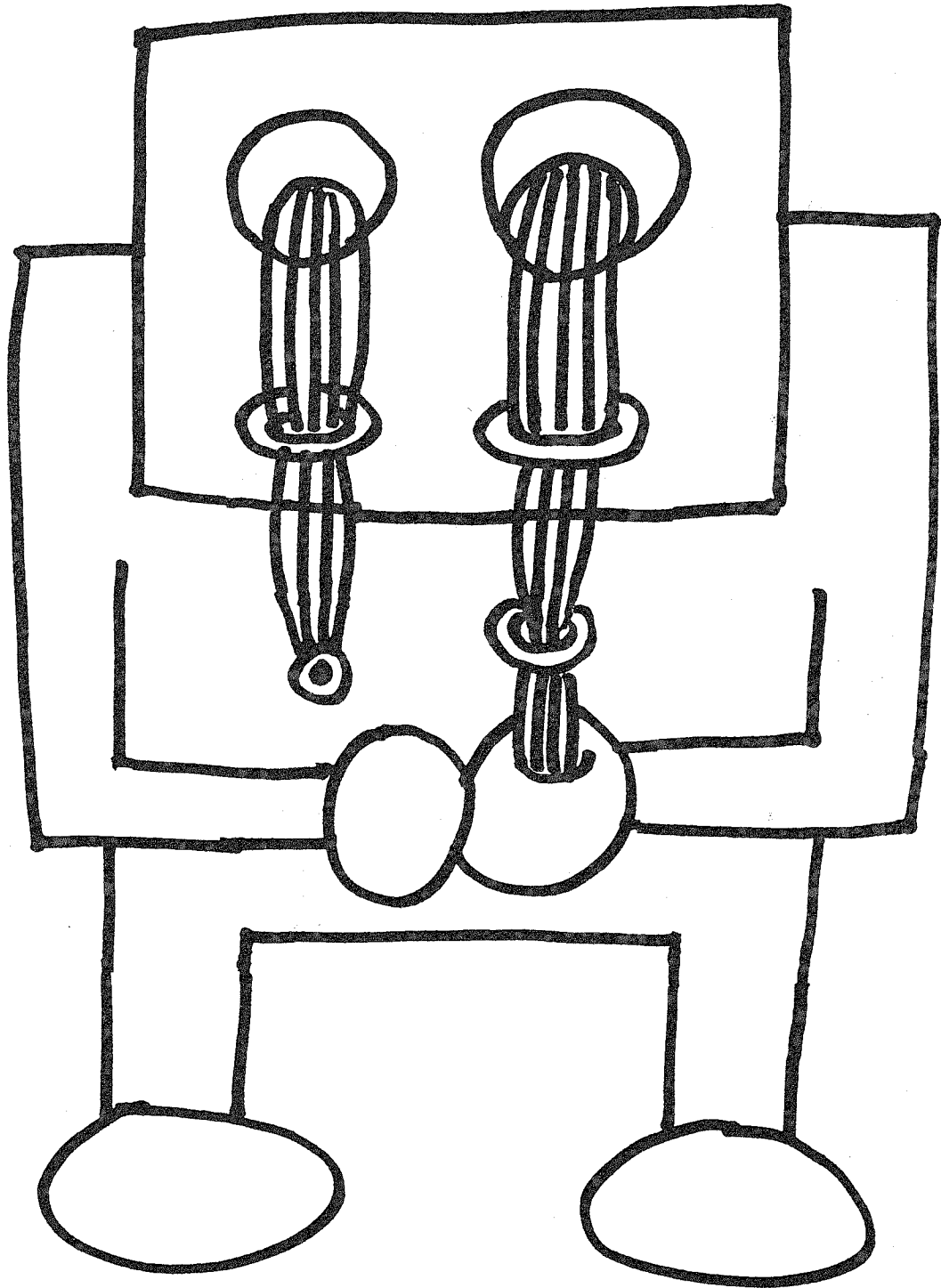
暗い広間のまんなかに柱があって、それに片手でつかまったベンジャミン・パターソンがトランペットを吹きながら。黒い水がどつと流れこみ、へやはしずんでいった。

ストの顔。

さあ、原子炉の移動だ。板壁がゆっくり目のまえを通りすぎ、すこし向きをかえる。山の木は黄ばんだ葉をつけ。谷川。これが箱船だ。問題は、どの動物をのせないか、なんだがね。

うなだれた黒い影が板壁の下の方に写る。ことわられて帰ってゆくのはだれだろう。

屋台は木の長いベンチをならべて、テーブルといすをかねる。どんぶりめ



し。もうひとつのどんぶりには、うす味スープ。なかみはよく見えない。エビのてんぷら。それを金色の指のようにそろえて、おかあさんが売っている。もううす暗い。売っているものはそれだけ。

ウォークマンをつけて外をあるく。音楽はロックではいけない。環境音楽もだめ。半透明なひびきと不安定なリズムをもつものがいい。ポリュームをいっばいあげてはいけない。つまみを調節して、現実音が音楽の波に洗われながら浮きすみする状態をつくる。すると、風景がそこにはない音でフィルターをかけられているのがわかる。どこかちがうが、もとのままの風景には

ちがいない。

コンパクト・ディスクのポータブル・プレイヤーがでてきた。もうすぐポケット・サイズのものできるだろう。みんながレーザー光線をポケットにいれてあるく時代がそこまできている。その次はビデオ・ディスクだな。イヤホンつきのサングラス型透明スクリーンをかけて、すきな映像ごしに世界を見ることがもできるだろう。風景を別な時間の流れをもった物語でいろどりながらあるくと、古代人が仮面の目の穴から世界を見たときのように、この現実世界も絶対のものではなく、平行する世界線のひとつの廊下にすぎないことがわかってくるだろう。カフカの城だ。

(葉弥の作文から)

親友

湯本ひろ也はぼくの、親友です。

ぼくが、高なわから、ひっこしてきて、ほいく園に入り、最初に、友達になつたのが、湯本ひろ也なんです。

このひろ也は、こしてきて、ぼくは、ほいく園のとき、外人と、言われて、それが、うえの人で、ぼくは、頭にきて、けんかをして、二人だったので、ぶんなくって、もうやだから、こしてきて、ぼくは、外人というのをかくごのうえこしてきました。

そして、ひろ也に、であって、ひろ也は、外人とは、言わなかったです。

そして、うれしかったです。

そして、友達いや親友です。

ぼくの、もっているものは、ひろ也と、ぼくのもです。

そして、ひろ也のものもぼくのもでした。

そして、ひろ也との、思いでは、たくさんあります。
たくさんあります。書ききれないくらいあります。
「ごきをひいて、おもちゃで遊んだことです。」

ほかにも、いろいろあります。
とにかく友人でもあり、友達でもあります。

とにかく親友です。

いつも、いっしょに帰りますし、いっしょに行きます。

ブロックでも、いっしょです。

ブロックで、班長が、ひろ也で、わくが、副班長です。

ぼくとひろ也は、いつも、大それたことと言うのか、とにかくそういうものは、ひろ也に、まかせて、遊びならぼくが思いつきます。

いつも、ひろ也と、気が、あって、二人で、なんでもというか、とにかく

できます。

そして、スポーツも、ぼくとひろ也は、スポーツが、まあまあです。

が、とにかく、気が、あいます。

親友湯本ひろ也です。

ガートルード・スタインは小学生のつかう雑記帳に詩をかきながら、ノートにもとから印刷してあることはも詩にとりこんでいった。ジェイムス・ジョイスはクレヨンのおおきな字で原稿に書きこみをした。ウイリアム・パロイズは文章を録音したテープをつなぎかえる。ジョン・ケージは電動タイプライターの書体を交換しながら日記をつける。

クセナキスは製図機のうえで60段の

五線紙の原紙をえがき、ヴァイオリン・ソロから大オーケストラまでその五線紙で間にあわせていたが、いまや出版社は印刷されたようにきれいな原稿しかうけつけなくなった。

坂本龍一が「音楽図鑑」をつくっているところをのぞきにいったり、曲ごとに一つのフレーズをかきこんだ一枚の五線紙があるだけだった。

高橋鮎生はどうやって作曲しているのだろう。テープに録音しながらつくった後で、必要なところだけ採譜しているような気がするが、まちがっているかもしれない。

60年代にはやった図形楽譜は音楽の感じかたをほとんど変えなかった。左から右によみ、点は音符で線はその長さをあらわす、という風に、記号を変えただけで、五線紙にかくのとそんなにはちがわなかった。

ペンカタイプライターか、五線紙か

テープか、というばあいは、つくられたもののスタイルのちがいが、というより、作るひとの姿勢のちがいだから、コミュニケーション回路もそれに応じて変わることになる。

ローリーといっしょにあるいてゆく。花さくセヴィリアの五月。朝も早くて人のいない街路、家はみなよろい戸をおろしてねむっている。
かるい羽ばたきの音にふりむくと、かの女は左目を射ぬかれて、矢先が首のうしろにつきでていた。

毛布にくるまった少年が吹雪のなかを足ひきずって。グレン・グールドのひくバッハのへ短調コンチェルトの第二楽章。そこにタイトル。カート・ヴオネガット原作の「スローター・ハウス5」。それをあたたかいサンディエゴの海岸通りの映画館で見ている。
ボストンの雪のなかを足ひきずってあるいていった日。内側に毛を張った長靴がおもい。

顔をあげると、みやげもの屋の店内でいすにすわっている。じぶんがだれなのか、おもいだせないが、ともだちの電話番号だけはわかつている。

「脳波に異常はありません。今夜もし吐き気があるようなら、明日までもたないかもしれないね。まあだいじょうぶでしょう。」

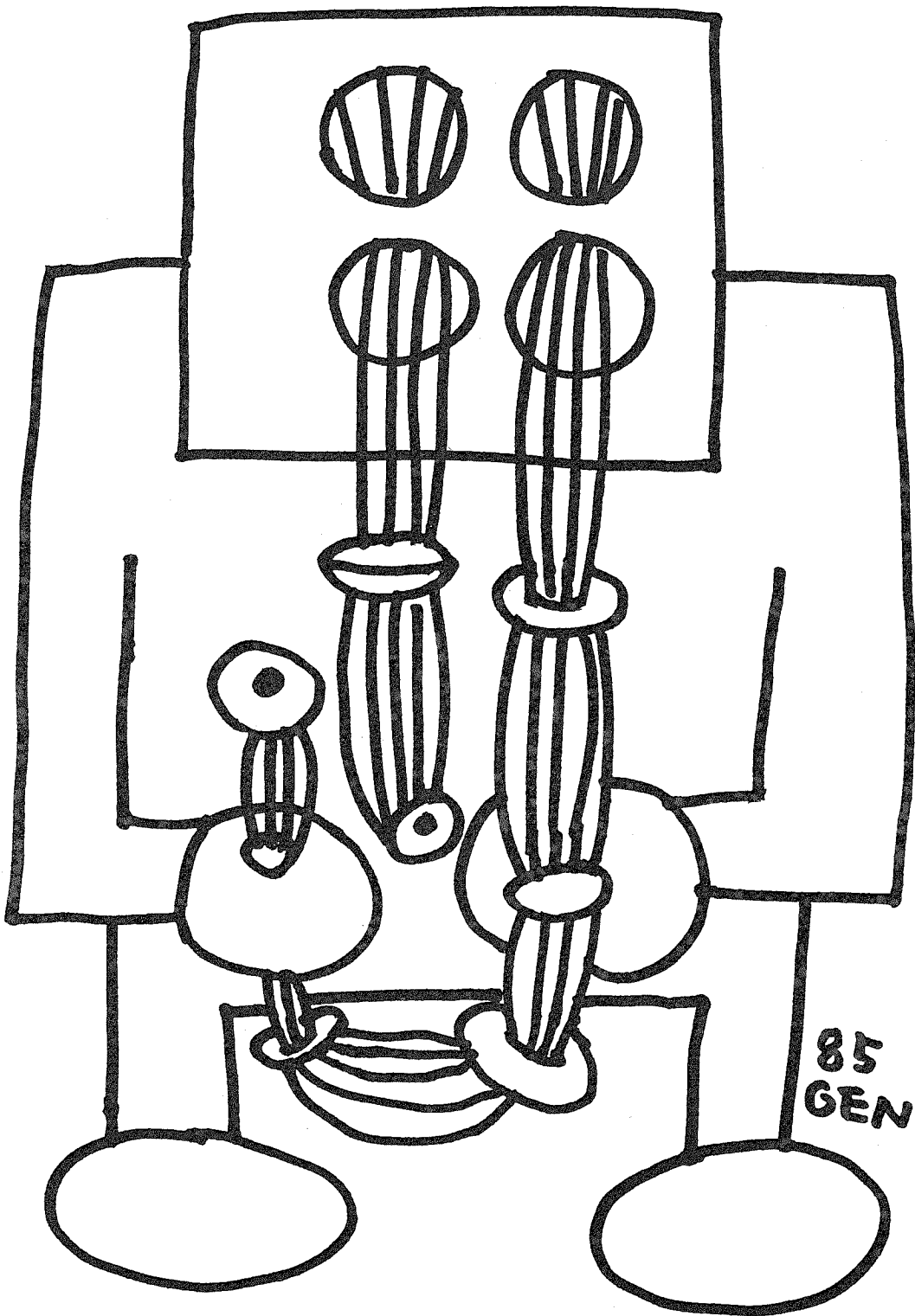
床のうえにマットをしいて、ふとんをぐるぐるまきつけて、天井を見あげ

ている。なぜボストンにいるのかわからない。へやの壁がふくれたり、急に遠のいたりする。

幅3メートル、高さ1メートルの絵。濃いみどり色で木のしげみをえがいたもの。ガラスのショーウィンドー越しに左手から自然の光が、かすかに絵に反射している。左を見ないでも、そこに二階テラスにでるアルミサッシの戸があることはわかつている。

絵のクローズ・アップ。目のまえ30センチの距離からでも、絵の全体が見えている。

見えない手が、絵のうえにもう一枚の絵をかさねる。幅も高さもひとまわりちいさい。おなじ風景だが、こっち



は紺色にぬられている。

なべ型のゴングがつるさきでいる。

木型をとる。そこにとけた鉄をながしこむ。木型はこげてけむりをあげ、端からとけた金属がはみだしてくる。

型がゆがんでしまったら、おなじかたちのゴングはもうつくれないじゃないか。

ヴァリハは竹筒のまわりに数本の金属弦をむすんでつくる。指ではじく楽器。6本の弦から4小節のフレーズをつくってくりかえす。音のひとつひとつが白っぽい柱に変わってそびえたち、そこにうす暗い広間ができる。

柱のかげで、いそがしくうごきまわる人たち。映画をとっている。

ヴァリハをひきつけながら、竹筒の表面をうすくけずって、くさびでもちあげて切り出し弦にする。金属弦がだんだんとはずれて、つくったばかりの竹の弦のやわらかいひびきがとって

かわる。4小節フレーズのかわりに1小節のくりかえしになった。フレーズがみじかくなると、音から立ちのぼっていた白い柱は土台をうしなっておたがいにもたれかかり、とけあって白いドームになる。

これじゃ映画はむりだ。もう一度金属弦に変えよう。

●
社会党の月刊誌に「社会党に望む」という文章をたのまれた。

政党に何かを望んでその望みがかなうというようなことが、一体あるのだろうか。その逆がふつうではないだろうか。選挙のたびに、人びとは「政治をしたい」という政党の望みをかなえてあげるのだし、そうして選ばれた政

党がきめる法律や、権力を取って政府になった政党の命令にしたがってあげてもいい。人びとの生きかた全体を支配できる政治の専門家集団が人びとに望んでいる、いや、それだけでなく、力で強制していることからの大ききにくらべたら、人びとが政党に望むのは時たまの、ほんのささやかな願いにすぎないだろうが、それでもほとんどかなえられることはないのだ。

人びとは政党をえらび、政党は政府をえらび、国家をうごかす、というようなことはなかった。国家がまずあった。それをうごかそうと権力にちかづいた政党は国家のメカニズムにうごかされて変質した。人びとは国家をうごかさない。国家は人びとを守らない。国家は警察や軍隊をもっている。税務署ももっている。戦争になれば、軍隊はまず軍隊を守る。国家が国家を守るために人びとを殺すのだ。

ニュー社会党は現実路線とも、右傾化だともいわれているが、万年野党にあきて国家に目覚めたのだろうか。それとも国家が社会党をよびさました、と、いいのだろうか。政党であるかぎり、どんな理想をかかげていても、国家の力がつよくなる時代には、国家の方にひきよせられるのだ。いままで日本は経済大国だった。いまやそれだけでなく軍事大国になろうとしている。成長した国家機構がそれをもとめ、それが中曾根という人、自民党という政党をうごかしている。石橋委員長という文化大国としての日本は、軍事大国となった日本の次期目標になるだろう。いま、情報時代の文化はハイテクにかぎらず全体として兵器の平和利用をやっているだけなのだ。

文化の方からいえば、芸芸にかぎらず生活様式にしても、物質的ゆとりと精神の自由がなければ生まれない。第

三世界の文化だって、人びとが苦心してつくりだしたゆとりから生まれている。貧しくてもいいというのはいくらもいらない。だが、ゆとりと自由はしばしば両立しない。カネをだせば口もだすのがこの世の常、とすれば、パトロンの必要なものについては、できるだけ小さなパトロンをえらぶのが知恵というものだ。

文化のパトロンの最大のものももちろん国家だが、これは危険な状況だ。日本の文化人はすぐヨーロッパをうらやむが、フランスの例を見ても、うらやむことは何もない。アポリネールもドビュシーもピカソもパトロンは個人ですましていた。いまのフランスでは国家がそれにかわってほとんど独占的パトロンになっているが、文化の力はおとろえた。どちらが先かはともかく、いまのフランス文化は国家に寄食して

やっと生きのびている。予算は毎年けずられていく。しかもいまは社会党政権だ。政治にも文化にも展望は明るくない。フランスほど中央集権化していないとはいえず、ヨーロッパの他の国でも似たようなものだ。文化は野の花だ。ほっておいてもらいたい。むしろ、国は滅びて山河あり、なのだ。日本のように中央集権化国家で長いものには巻かれるという心情がしみついた国では、国立劇場さえない方が文化のためだ。

万年野党としての社会党は、ときには市民の思いを代弁して国家の暴力を阻止することもできた。だが、それは代行者の限界をこえられなかったし、こえようとしなかった。いま時代はかわり、社会党の役割もかわろうとしている。ニュー社会党は自衛隊を認め、原発を認め、韓国の現状を承認し、いまあるものは何でも認めて政権にちかづくだろう。政権をとればフランス社

会党のように核武装や武器輸出だってやるかもしれない。国家論理がひとつの政党のみこむのはめずらしくもない。

議会民主主義に見切りをつけた市民たちはものごとを実現するために別のチャンネルをつかいはじめた。だが、国家論理はまだつよい。それは緑の党のようなものさえのみこんでしまう。いま必要なのは逆に、ひとつの政党が自らを横断的市民組織へと解体してみせることではないだろうか。国家には歯がたたないかもしれないが、それを支える党派論理は、もしかしたらくすすすることはできるかもしれない。もしできなければ、最終戦争がすべてを洗い流すまで、こんな世の中がいつまでもつづくだけだ。

石井かほるさんにたのまれていくつ

かダンスの音楽をつくったが、ダンスーがどんな風に動きをイメージし、ダンスの構造をつくるのか、まるでわからないままである。ホラ、あそこあの動きのきっかけで、といわれても、何をさしていつているのか、おもいだせない。動きについてはことばをもちえない状態なのだろう。ことばがなければ、記憶もない。楽器をいじりながら、ときどきふりかえると、何かが見える。それがその「きっかけ」なるものなのか、確信のもてないままに音をうごかしてみる。

60年代の現代音楽は、からだをうごかすというようなこととは無縁だった。あたまのなかで澄みわたるにつれ、からだはうごかなくなる。たったひとつの観念で世界をおおうことができれば

よかった。70年代のミニマリズムでも、それはおなじだった。

いまは、ものごとをつなぎとめていたこだわりの糸が切れて、ふわふわうかびただよっている。ひとつの方向はもう見えない。触手がからまりあった不定形が見えかくれする。ことばの圧力が急になくなって、音やうごきが自由になる束の間。まもるものも何もなく、この後にのこるものも、たぶん何もないだろう。エネルギー消費は最少限。

どちらかといえば、ひきのばされた解体の瞬間。じっさいにはしらずんでゆくの、わきあがる渦のなかにいるような錯覚。おちてゆくときの無重力状態。夕映えの世界を踏みつけるシヴァの足首の鈴。おどりがはじまるとき、エビはもう死んでいた。筋肉の記憶だけが、はげしくけいれんする。

一九八四年は、たくさんのレコードをきいてすごした。ほとんどは、買って一度きけば終わりだ。くりかえしきいた何枚かは、じぶんのかんがえを追う時間をつくった。ウォークマンの音をすかして風景を見たとおなじように、レコードをすかしてじぶんのなかのぼんやりしたかんがえのうごきを見ていたのだ。ネッド・ローゼンバーグ、エリオット・シャープ、デヴィッド・シルヴィアン、ローリー・アンダーソン、ジョン・ゾーン、フレッド・フリス、坂本龍一、三宅様名、高橋鮎生。できあがってしまったものは、一度きけばいい。そこにあるようで、まだはっきり見えないものを手がかりに別な世界線をたどってみたい。

本がよめなくなった。あいかわらずたくさんの本を買ってはくるが、よみとおしたものはすくない。ことばがつかさなっていて意味をつくったり、かたまりんかく線のなかにものをとじこめるのを目で追いながら、こちらはそこからじきだされてゆくのがわかる、そんな本がおおい。よみすすめるほどにあいまいになり、糸の切れたことばがそれぞれかっっておよぎだして、たくさんの廊下に枝分かれするような本がほしい。

いつでもゆめみていたいのだ、できないけど。とおくにいってしまうのではなく、いまここで、だれにも気づかれず、日常生活のこまごまとした作業をつづけながら、薄皮一枚下にゆれている樹液に波長をあわせられればいい。そのために、目をよせてみたり、目の端でものを見たり、ななめ上を見あげながら焦点をずらしてみる。

(一九八五年の年賀状より)

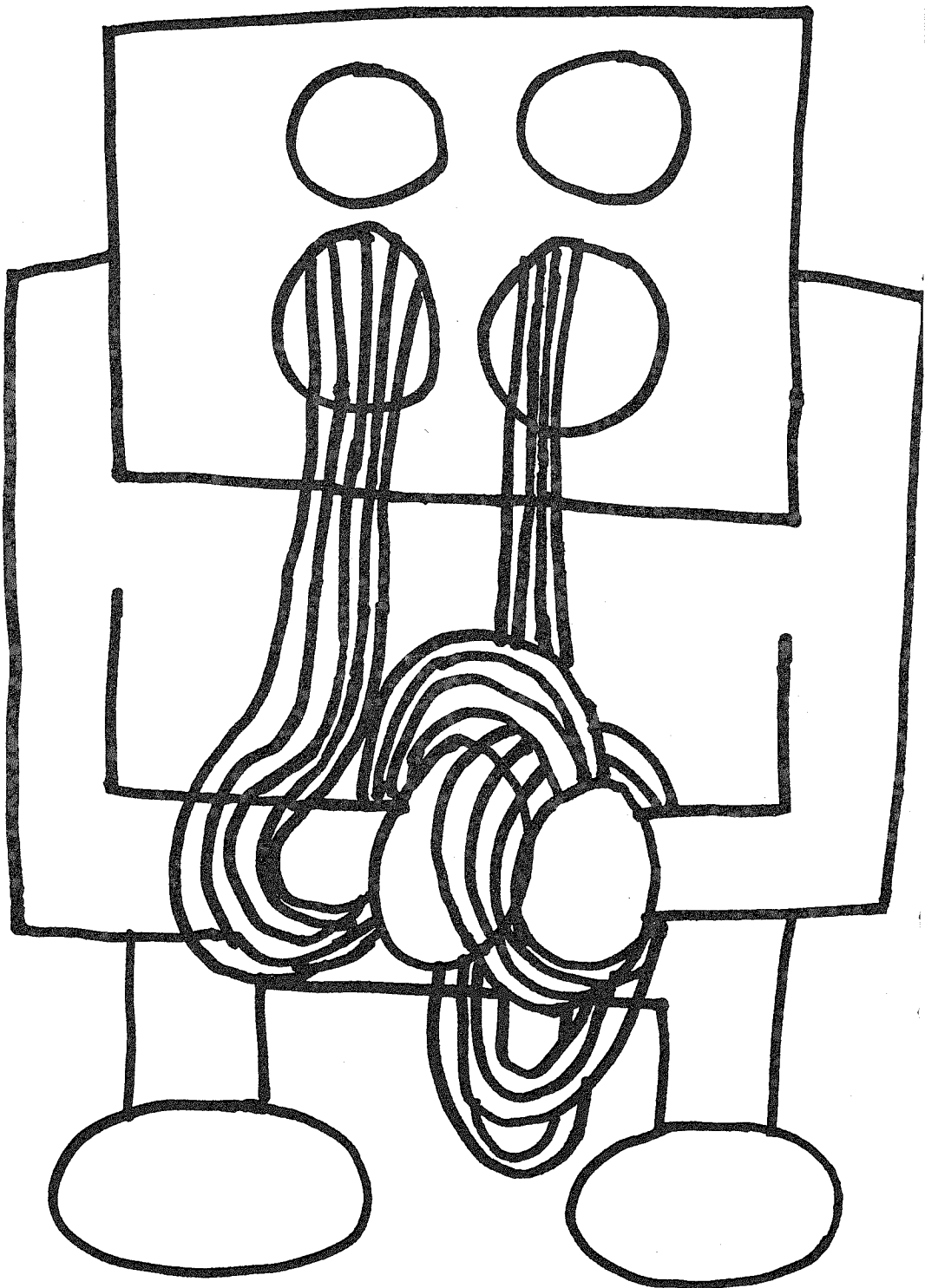
八巻美恵様

府中市曙見町四一10

桜庭章司

謹賀新年

昨年も多大のお世話になりました。



有難うございます。

私にもできる社会的な仕事は私をデ
タラメ事由で年間百十日間のチヨ一バ
ツに処したファシズム廃人処遇の解体
です。今年こそ、この廃人処遇を叩き
つぶします。乞御期待！

「水牛通信」の限らない発展を祈り
ます。

一九八五年 元旦

牛モーモー

たー(田)かいど

たーのみじ(水)え

くんでえすな

あさばん(朝飯) ゆうばん

にじんなよ

青い海出版社 より

市、十二月一日沖繩那覇ジアンジアン
十二月二日沖繩読谷村、十二月五日石
垣島白保、十二月九日群馬県榛東村、
十二月十日群馬県片品村、十二月十二
日長野県上田市、十二月十三日新潟県
柏崎市、十二月十五日東京早稲田奉仕
園、十二月十六日東京渋谷水牛楽団献
送カラワコンコンサート、十二月十八
日東京新宿、十二月二十九日東京山谷
十二月二十九日東京国分寺市、一九八
五年一月五日帰国。

(高橋悠治)

一九〇四年に生まれた作曲家の守田
正義さんの楽譜の年賀状

カラワコン楽団の農村・漁村キャラバ
ンも無事に終わった。次に全日程をか
いておく。

一九八四年九月二十三日大阪到着、
九月二十六日東京中野すかぶら坐、九
月二十八日松本、九月二十九、三十日
長野県黒姫、十月五日東京早稲田奉仕
園、十月七、八日千葉県三里塚、十月
十二日茨城県八郷町、十月十三日茨城

県玉造町、十月十六日千葉県千漣町、
十月十七、八日千葉県銚子市、十月二
十日埼玉県東松山丸木美術館、十月二
十一日東京中野、十月二十四日名古屋
市、十月二十七、八日東京渋谷水牛楽
団歓迎カラワコンコンサート、十月二十
九日宮城県古河市、十月三十日秋田県
本庄市、十月三十一日秋田県湯沢市、
十一月一日山形県羽黒町、十一月三日
山形県南陽町、十一月四日山形県白鷹
町、十一月六日宮城県南郷町、十一月
七日栃木県壬生町、十一月十日静岡県
富士川町、十一月十二日奈良市、十一
月十三日和歌山県那智勝浦町、十一月
十四日和歌山県本宮町、十一月十五日
新宮市、十一月十七日高知市、十一月
十八日高知県窪川町、十一月二十一日
熊本市、十一月二十三日水俣市、十一
月二十五日奄美大島宇検村、十一月二
十六日奄美大島名瀬市、十一月二十九
日沖繩那覇市、十一月三十日沖繩名護

賀正

1985

石川啄木 詩
守田正義 曲

HELP!

ブタ草

おはあさんと中学生の合いの子見たいな役をひっさげて、半年振りに……舞台。「シルバー・ヘッド・ロマンス——銀髪慕情」うたって踊って、笑いあり、涙ありのSFミュージカル。

数日前から仕込みに入り、合宿生活。私は元気だ。一日ごとに体重が着々と増える。よく食べる。だから元気なんだと決めつけている。すると太るのも正当化されてくる。ちょっと暖まったりとすると、身体中がほてほてだし、りんごのほほになる。何故か、今まで持ったことのない開放的な健康の実感だ。これならハードスケジュールも恐くない。つい一カ月ほど前まで、あまりのしんどさにめげて「ああ、もうこうやって体が使えなくなっていくんだ、あたし」などと思っていたのが夢のよ

そが溶けるのがお得意の私とはいえ、カツラをかぶって紫のパンツにショッキング・ピンクのTシャツを着て踊っている……というのはちょっとまぢがいですね。

あっ、邪魔が入った。旧千円の伊藤博文さんの顔を真ん中で折って、頭とひげの部分だけ直結させると、くらげになる……という楽しい遊びを教わる。今更遅いね。でも、本物のくらげをビヨンとのばしたら、いきなり伊藤さんのお顔がぬーっと現れてきたりしたら、ビックリだなあ……なんてこんなバカなことを言っている場合でもありませんね。

あと教時間で初日があく。駒場小劇場は、二年ぶりで、ドキドキものだ。相変わらずカビ臭い倉庫のようなこのホールは、一日いるだけで、体中がガサガサになり、鼻の穴までホコリの巢……まぢがいなくあらゆる病原菌がウ

う。なあんだ、食べりゃよかったんじゃないか。

朝から晩まで舞台づくりの作業が続く。ただただ時間がない。水牛の原稿も書きそびれて今日に至る。今、すきま風の合宿所の一室で、ジャージにはんてん姿の私は、こたつを占領し、目の前には、梅こんぶ茶とギンビスのアスパラガス。大好物。気がつくとお菓子を口に運ぶのに忙しくて、ペンはお留守。隣の部屋では、衣装製作の室内工業が繰り広げられる。連日の徹夜作業で異常にHighになった女の子たちのしゃぎ声がミシンのガタガタ音を圧倒している。

あーあ、今回もやっぱりかわいい子ぶりの子の衣装は着れない私。おまけに白髪に染めたり、踊りの時にかつらをかぶったり。とんでもないんですよ。こたつの根元には女の子が三人幸せそうにお休み中。おとといは夜中に宴会。

ヨウヨしているということは誰でも知っている。

今回、うたのソロがあるので、のどが枯れてしまったらどうしよう。マイクなし、キーが高い、テンポがゆっくり……と悪条件が三拍子そろっている。とにかくカッコよく盛り上がるうたなのに、なかなか思うようにいかない。そうだ、思い切って牛さんのようにモオーッと鳴いてる感覚でやっちゃえば……などという空しいことを言っても仕方ないのに。何といっても、駒場小劇場はなん十年も昔、馬小屋だったそうですから……。

あと教時間で初日があく。もう後がない。今は当然、役者たちはスヤスヤ眠っている。とうとう私の睡眠時間は二時間半になった。わがままな言い分とは思いますが、今は心底スタップだったら三日三晩でも何日でも徹夜しますから、お願いですから……役者お休みし

夕べは井戸端会議、と忙しくて、さすがに今晩はダウンですね。あー井の頭線の始発電車が走った。

4日後、初日前夜——鼻づまりで鼻がつまっていると、顔中の穴全部に栓をしてあるみたいない息苦しさに襲われる。すべての感覚がダメになった気がする。つねつねもたたいでもよくわからない感じがする。

初日を目前にして、今、そんなボーッとした感じだ。緊張するわけでもなく、かといって自信満々だというのでもなく、とにかくすべての進行状況が遅れているが、焦っても仕方ないのでスローモーションで行くあてもなくもがいている風だ。

自分の衣装整理・台本読み・もちろん睡眠……と今夜だって山ほどやらねばならないことがあるのに、原稿書き。えへへ。セリフもまだちゃんと覚えていないのに、全然ダメだ。いくら脳み

たいよお……弱気。

あー、こんな時に限って、部屋の蛍光灯がつかたり消えたりしはじめる。まああ、始発電車が走った。もうセリフなんか忘れちゃえ！ 衣装なんかなくてもういーぞー。そう、ここで一発発狂してしまえば、恐いものなした。

「雪よ、降りつもれ、雪よ。私の髪にキスしておくれ」うたの最後の一行を繰り返しくちさむ。肝心な時にちっともセンチじゃないから、もう初日からいきなり、仁王立ち役者やっちゃうんだ。ええい！ やけくそ。

(竹内晶子)

明日は、ゲレンデの ブタ草

突然、今晩からスキーに出かけるこ

とになった。高校一年のスキー教室以来だ。まさか今さらこの歳になって、今まで考えようともしなかったウインタースポーツに興じることになるのは夢にも思わなかった。いや、実際は行くだけ行って、温泉につかりっぱなしの三泊四日になるかもしれない。などと謙虚さを装ってはみるが、先程までありあわせのスキーズボンに白いブリッコ帽子、思わず張りこんで昨日買ったきたショッキングピンクのかわいいダウンを着こんで、茶の間をシュ、シュッシュとスキーヤーの真似をしながら飛び回ってたのは、もちろん私です。ちょっと短足が気になる。ま、いいか。今に始まったことじゃない。このタイツ男物？ はっずかしい！ あらま、大変、スキー板にはめ込んだ靴って、どうやったらはずれるんだ？ 母いわく「靴、スキー板につけたまま行っちゃったら？」ひどい。友達に電話し

てるのいやだもの。私なんか自慢じゃないけど、乗り物酔いの女王様なのよ。中学の時の修学旅行なんか酔っ払いすぎて、三日間バスの中で寝たきり、見学どころの騒ぎじゃないし、夜なんか保健の先生と特別室で寝たんだから。乗り物酔いだって二日酔いってあるのよ。本当、辛いんだから。乗り物酔いに利くおまじない——梅干しをおへんに張る——これはおすすめ。

学校行事以外の貸し切りバスは二度目。一度目は高二の時、担任教師の婚約祝いと称してスケートにクラス全員で出かけた時。車内をクリスマスもまっ青なくらい、ギンギンに飾り付けしおめでどうデコレーションケーキを用意し、飲めやうたえやの大騒ぎ。あの時、目に涙をためて御自分の初恋物語をしてくださった杉山先生も今は、三児の立派な父親であらせられます。スキーなんか持って夕方のラッシュ

たら、はっきり言ってバカにされた。ま、いいか。今に始まったことじゃない。スキー場ってのは寒いんだか暑いんだか、よくわからない。積雪は厚いかもしれないし、温泉は熱いかもしれないし、私たち乙女の恋は熱く燃えあがるかもしれないけど、暑いことはさすがにないか……。あ、でもリュックが小さい。スキーのリュックってこんなに小さかったっけ。毎日、稽古着やら何やらがラクタ入れて持ち歩いてるバックの方が数段でかい！ あ、荷物か二つになるのいやよ。カッコ悪いもの。旅行上手は荷物が少ない。どうせ下手よ。お金持ちじゃないものね、旅行上手になれるわけないわ。どうせ趣味は寝ることですよ。私の履歴書なんてきれいなもんだわよ。趣味・寝ること。資格・特になし。特技・特になし。いま、予感すること。来年の春は生命保険会社かなんかに就職しちゃう

電車に乗るのいやだなあ。あ、でも、今年の三月、芝居の稽古場に通うので、夜の池袋サンシャイン通りを歩くたびに、スキーバスを待つ若者の群を横目で見ながら全身に覚えたあの感情——いいな、楽しそうで。ふん、いいもん——あれを、巷の忙しいお勤め帰りの人々に、今度はこの私がプレゼントするというのはどうだろう。性格の悪さを、いやサービス精神を前面に押し出すという方針を取るならば、決して重いつととか、ねむいとか、ましてやかっただいなどという怠惰な雰囲気はこの際タブーだ。わあー、これからスキーよ、るるん。銀色のゲレンデが私を呼んでいる、という期待と喜びに胸をふくらませ、瞳をダイヤモンドにしなくちゃ。そう、この間の忘年会で、課長さんと琵琶湖周航歌をデュエットしたあの乗りを思い出したい。

誰かに自分の誤ちを指摘されても、

かもしれないこと。そして再来年の春は、再びブー太郎になっているだろうこと。

私の部屋のこたつの上に、高さ30センチ程のクリスマスツリーがある。全身銀色で、枝々に赤い実がついただけのシンプルなおツリー。お気に入りの子には、何も飾りはつけないことにしている。何もつけなくてもひとりでもキラキラ輝いて、私の好きなタイプだ。自然児のままがいい、素顔がいい……。でもいつもそう思っていた私自身の素顔が、肝心の素顔に最近しまりがいい。と笑って言える朗らかさの裏には「……とでも言っておこうか」という余裕がなきやダメなのに。不安はないけど、自信もない。

いやなことを考えていると、ねむくなる。今、寝たらいけない。そう、夜行バスだもの。眠れなくて一人で起き

認めるのが嫌でふくれっ顔をして怒ったふりをしてるうちに本気で怒っちゃってたり、うそ泣きしているうちに節操がなくなり本気で泣きぐずれちゃったり、身をよじらせても床をころげまわってもどうしようもなく辛くなってしまう……。ずるくて、さみしくて、驚きで、桃の木で、サンシヨの木で、日常がいつも何にも勝っている方が私は好きだ。この間の芝居の舞台は、楽に日常に勝ってしまった。多分日常の何もかもを本気で「まあ、いいか。今に始まったことじゃない」で片付けはじめてしまっているのかもしれない。お片付けはまだもう少し先にした。だから、とっ散らかった私の部屋も、また母に小言を言われるだろうけれども、このままで出かけちゃえ。なんて、都合のいいこと言いながら、行ってきまーす。

(竹内晶子)

トルコ行進曲

トルコぶる いいところ オスベにほんばん あわおどり
 よしわらなきあと おとこのロマン
 おとこなら だれでもが いちどは のぞいてみたくなる
 なまめかしきよびな それはトルコ
 いかしたところだぜ やりたくなるんだぜ むずむずして
 くるぜ あしたはきゅうりょうび
 まちのひが キラキラと まねくよ こよいの せいきま
 つ らんじゅくのじだい たいはいのとき
 そのうち やってくる いつかは やってくる いくまに
 おおじしん にげばは どこだろ
 どうせなら かいらくの ただなか いきたい てんごく
 へ かんおけににてる あのむしぶろで

ゆくぞ トルコへ かねつづくかぎりゆくぞ トルコへ
 にようばにゃないしょ うえの あさくさ かわさき オ
 オミヤ ちばだ ほりのうちだ いけぶくろ
 ところが なんだかしらないが これから いったはな
 らない すなわちトルコと りゆうは トルコの こくみ
 ん おこった ぶじょくだ ぐれつだ ほこりある トル
 コのこっかに こくみん トルコとちがうよ トルコはト
 ルコだ トルコとちがうよ トルコのみやこは アンカラ
 アンカラいったい なんだんねん トルコはだめだめ
 いったはだめだよ にほんのせいふよ なんとかしるよ
 はいはい わかった なおすよ これから トルコはトル
 コといいません

けんぜん ごらくの イメージ なければ だめだよ お
 ぶろは からだにいいのだ だけども やっぱり せんと
 とよぶには いささか ぐわいっちょわるかんべ
 こしつつきよくじょう これにしようはじめは どのことな
 くきごちない だけど そのうち なるさ いつかはト
 ルコと いうよびなも わすれる
 トルコとはいえないの トルコといえない トルコぶる
 トルコといえない それはなんなの
 こしつつきよくじょう じゃ なんとあ あじけが ない
 じゃない どくぼうに いれられた スッポンポン エレ
 クト しなかんべ エレクトラは ギリシャ ひげきは
 ウンザリだ デュオニソスは きげき ねくらには おさ

らばよ ことばのたのしさ だんあつし にほんのせいふ
 は ファシズムなり トルコといて どこがまちがいか
 しせんにもまれた ことばをなせ コントロールする
 とはなにごとか このくにの ことば けんりよく つご
 うよく どうにもできる だけでも かんがえてもみろよ
 トルコだけ かえて どうなるものか あまたある よ
 びな ロンドン ロンドン ロンドン ロンドン ロンド
 ン ハワイ

作曲 W・A・モーツァルト
 作詞 斉藤晴彦

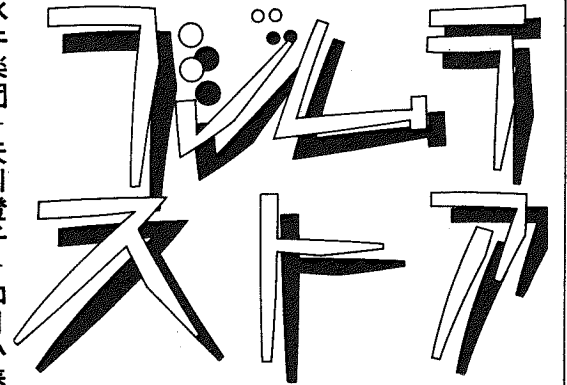
編集後記

いつになくいそがしい年の暮に雑誌一冊の編集をやすうけあいし、ひとに相談しているひまはないから一冊全体をじぶんでかこう、とかってにきめ、暮・正月も毎日のように酒をのみ、ピアノの練習をし、矢野龍子のために歌二曲つくり、その合間にワープロにむかって、かいてもかいても、まだ先があり、ついになげだして、レイアウトで処理してもらうことにする。

12月16日のカラワン歓送コンサートで発表された斉藤隆彦の新作と、日記のしめきりにおくれたブタ草の旧作と新作をあわせ、小泉さんがきてとまった翌朝、急に靈感にうたれたらしく一気にかきあげた「年頭所感」をその場でタイプして、どうにか雑誌らしくなった。

というのが、責任編集の実態でした。印刷労働者の覚悟をきめたはずの津野海太郎はいっこうにあらわれず、さあ、いまから印刷もやってしまうのだ。

次号の編集者は田川律さんです。(高橋)



水牛楽団+矢川澄子+如月小春
定価二三〇〇円(送料サービス)
夜這いの曲 しずくの曲 祖母
のうた 最後のノート だるま
さん千字文 ワルシャワ労働歌
花巻農学校精神歌 ポクハン
ンケイスル 都市 ★編集部あ
て郵便振替で申し込んで下さい

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会

口座番号 東京四一九一七九二

購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)

住所 氏名、電話番号、何号からと明記。

*本誌は次の書店にあります。

模範舎(新宿) ☎三五二一三五七

ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七

信愛書店(西荻窪) ☎三三三三二四九六一

ワンラブブックス(下北沢)

☎四一一一八三〇二

アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)

カンカンポア(西武渋谷店B館B1)

ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)

名古屋ウニタ書店 ☎七三二一一三三八〇

水牛通信 第七巻第一号 一九八五年

一月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田

正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎154

東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方

電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座

東京四一九一七九二 印刷所 佛トライ

プリントショップ